第 45 回 START プログラム（インドネシア）

2017 年 8 月 26 日から 9 月 10 日までの約 2 週間、第 45 回 START プログラムに学部 1 年生 23 人が参加し、河本尚枝准教授（大学院総合科学研究科）ほか 2 人の職員とともに、インドネシア共和国東ジャワのマラン市にあるブラウィジャヤ大学に留学しました。

ブラウィジャヤ大学では、さまざまな分野から、現在のインドネシアを知るための授業が行われました。初日は授業が全て英語で進められることに不安を感じていた学生も、日を追うごとに、文法の間違いなどを恐れず積極的に質問をする姿勢が見てとれました。また、授業を通して、インドネシアの文化や歴史、社会問題に触れ、日本との共通点や相違点を考えることで、異文化への理解を深めました。さらに、授業で学んだインドネシア語を日常生活で利用したり、現地学生との交流を楽しんだりしていました。

本研修では、学生 2 人につきブラウィジャヤ大学の学生 1 人がパートナーとなっており、講義終了後の自由時間には一緒に街に出て、身近な疑問や発見を、英語やインドネシア語、時には身振り手振りを使って懸命に伝えていました。

また、現地の小学校訪問では、折り紙やけん玉など、日本の遊びを英語とインドネシア語で紹介したり、日本の歌を一緒に歌ったりして、小学校の児童達と交流を深めました。

ホームステイを通しての社会貢献も研修目的の一つとなっており、大学のあるマラン市から 2 時間程度離れた地方の村で、農作業などを経験しました。ホストファミリーにはほとんど英語が通じないため、パートナーである現地学生も一緒に滞在しました。トイレや食文化などの生活様式の違いに、初めは戸惑いを感じていた学生も、ホストファミリーの温かさに触れながら、各家庭ならではの経験を得ることができました。また、ブロモ山へのオプションツアーでは、日本では見ることのできない壮大な景色に、インドネシアの雄大さや力強さを感じることができました。

研修最終日には、ブラウィジャヤ大学の教職員及び学生へのインタビューや、フィールドワークを通して現地で学んだことをまとめ、各自関心のある研究課題（ごみ問題、障害者支援、伝統衣服、国語教育など）について、英語でプレゼンテーションを行いました。最終日の送別会では、感謝の気持ちを込めて全員で阿波踊りと歌を披露し、現地の先生方や学生との別れを惜しみました。

帰国後の事後研修では、改めて、グローバル・コア・コンピテンシー（行動指標）を用いて自身の成長を振り返りました。「英語を継続して学習したい」、「ニュースを見るようになった」など、学習意識や世界への関心が向上していることから、コンピテンシーを通して、本研修における振り返りと自己評価ができていること、また、「他の留学に行きたい」、

「この経験を将来につなげたい」などの意見も見られたことから、学生は自然と今後の留学やキャリアについても意識するようになっており、本研修での振り返りと自己評価から、次のステップへ移行していく様子も伺えました。

楽しくインドネシア語の授業を受ける学生

小学校訪問では熱烈な歓迎をうける

放課後にブラウィジャヤ大学の学生と交流

ブロモ山からの朝日に感動

送別会で披露した「阿波踊り」。最後はブラウィジャヤ大学の学生と一緒に。